『境界研究』No. 9（2019）pp. 017–046

20世紀初頭のロシア文学における「男性同性愛」をめぐる言説の構成と変容

―― ミハイル・クズミン『翼』から女性向け大衆小説へ――

安野 直

はじめに

ロシア文化史において、19世紀末から20世紀初頭にあたる「銀の時代」――とりわけ、革命によって検閲が緩和された1905年[(1)]から帝政時代が終わりを告げる1917年までのあいだには、性をめぐるさまざまな思索がなされた。この時期には、「男／女」という性の境界そのものを根本から問い直すセンセーショナルな作品が、相次いで発表された。固定化された女性の性役割や規範に再考を促す「新しい女性」や両性具有とともに、これまで取りあげられることの少なかった「同性愛」の主題が正面から扱われることとなり、このことは文学史上の重要なトピックのひとつとなった[(2)]。

では、同性愛[(3)]のテーマを20世紀初頭のロシアというコンテクストに置いてみた場合、こうした性愛関係は文学作品のなかで、どのように言説として構成されていたのだろうか。本稿は、男性同性愛をテーマとし、『天秤座』に掲載されるやいなやセンセーションを呼んだミハイル・クズミン(1872–1936)[(4)]の小説『翼』(1906)と、直接的にクズミンとの影響関係があるとされる女性大衆小説の旗手エヴドキヤ・ナグロツカヤ(1866–1930)の作品『ディオニュソスの怒り』(1910)、『ブロンズの扉のそばで』(1914)を考察の対象とし、友

(1) ルイーズ・マクレイノルズ著、高橋一彦、田中良英、巽由樹子、青島陽子訳『〈遊ぶ〉ロシア：帝政末期の余暇と商業文化』法政大学出版局、2014年、11頁。

(2) Lindsay F. Watton,“Constructs of Sin and Sodom in Russian Modernism, 1906–1909,” *Journal of the History of Sexuality* 4, no. 3 (1994), p. 369.

(3) 本稿では、男性同性愛に的を絞り考察をおこなう。というのも、男性同性愛と女性同性愛とではその歴史的背景がおおきく異なっており、それぞれ別個に考察する必要があるからだ。レズビアニズムはリディア・ジノヴィエヴァ＝アンニバルの『33の畸型』(1907)やソフィア・パルノークやマリーナ・ツヴェターエヴァの一連の詩作に代表されるように20世紀初頭に注目を集めたが、それ以前は男性同性愛とは対照的に、その存在は不可視なものとされてきた。

(4) クズミンの生年については、1872年とするのが通例であるが、1875年とする説もある*Суворова К.Н.* Архивист ищет дату: К изучению архива А.А. Блока // Встречи с прошлым: Сборник неопубликованных материалов центрального государственного архива литературы и искусства СССР. Выпуск 2. М., 1976. С. 119; *Богомолов Н.А.* Михаил Кузмин и его ранняя проза // *Кузмин М.А.* Плавающие путешествующие: романы, повести, рассказ. М., 2000. С. 8など。

DOI : 10.14943/jbr.9.17

愛と性愛のあいだを往還する男性同性愛の表象、さらにそこから見えてくる、20世紀初頭のロシアにおける性をめぐるディスクールの一端を明らかにする試みである。

本稿は同性愛を主題として扱うが、作家個人のセクシュアリティや、作中人物が同性愛的欲望をもっているか否かといったことを論じるものではない。そうではなく、本論文は「もし文学テクストのなかにホモセクシュアルの存在やホモエロティックな欲望が読みとれるのだとしたら、誰が、どのようにしてそれを読みとるのか[……]ホモセクシュアルというアイデンティティは、テクストにおいてどのようにして構築されていくのか[傍点原文]」(5)を問う読み方――「クィア・リーディング」(6)を志向する。したがってわれわれは、ただ単純に作品テクストに同性愛が描かれているか否かということではなく、テクストがいかにこれまで「同性愛を描いたテクスト」として解釈されてきたのか、あるいはテクストにあらわれる同性間の性愛にどのような視線が向けられたのかといった、メタ的視座のもと考察をおこなう。

結論を先取りして述べるならば、ニコライ・チェルヌィシェフスキーの『何をなすべきか』(1863)に端を発し、生殖＝再生産によらない人類の発展のために、あらたな性愛のあり方を模索する「新しい人間」(7)の構想として、男性同士の友愛と性愛の混濁した親密性が『翼』において示唆された。しかしそこを起点とし、1910年代に大衆小説の領域では、同性愛をめぐる概念の変容により、性科学の概念である「ホモセクシュアル」という主体の形成やより明確で直接的な男性間の性愛関係の描写がみられるといえるだろう。

本稿の目的は以下の三点において、その意義が担保されると考えられる。第一に、『翼』の先行研究や作品テクストを批判的に検討することにより、ホモセクシュアルを明示的に描いた作品であるとする文学史上の通説を再考することになる。そして第二に、これまでの研究においては、象徴主義と大衆小説という文学史上のふたつのジャンルは同時代に並立しながらも、その直接的な相互関係については考察される機会が少なかった。本研究は「男性同性愛」というテーマを結節点として、クズミンの『翼』から、女性向けの大衆小説へと連なる作品間の関係を示すことによって、象徴主義と大衆小説との断絶を埋める何らかの足がかりとなるだろう。最後に、考察の主題として同性愛を扱うことが、テクストから同性愛の欲望を読み取ったり同性愛者像を創造したりするような読解であったとするなら

(5) 松下千雅子『クィア物語論：近代アメリカ小説のクローゼット分析』人文書院、2009年、18頁。なお以下、とくに指示がない限り[　]内補足や下線強調などは引用者による。

(6) 同上、19頁。

(7)「新しい人間」という概念はこれまで多義的な意味で使用され、このことばをめぐって、さまざまな議論がなされてきた。1.2で詳述するが、本稿では19世紀後半から20世紀初頭において「新しい人間」が性愛や親密性をめぐるあり方の変革を志向した点に着目する。しかし「新しい人間」ということばは、ロシア革命やソヴィエト時代において、社会主義の文脈でも使用されてきた。この点については、佐藤正則『ボリシェビズムと〈新しい人間〉』水声社、2000年；アンドレイ・シニャフスキイ著、沼野充義、平松潤奈、中野幸男、河尾基、奈倉有里訳『ソヴィエト文明の基礎』みすず書房、2013年；高柳聡子「1920年代のソ連女性雑誌における「新しい女性」の創出と短編小説の役割」『ロシア文化研究』24号、2017年、1–14頁に詳しい。

ば、そこには強固な同性愛嫌悪が潜んでいることを指摘することによって、今後のクィア研究への道筋が示されるだろう。

本稿ではまず、20世紀初頭のロシアにおいて、同性愛がどのようなものとして把握されていたのかをふたつのパラダイムに分け、整理する(第1章)。というのも、19世紀から20世紀初頭は、西欧諸国での性科学の勃興によるパラダイム・シフトがおこり、同性愛をめぐるディスクールが錯綜していた時期であるからだ。したがって、ただ単純に『翼』や大衆小説のなかに男性同性愛が描かれている、という理解では不十分なのである。そこから一歩踏み込み、これらの作品が、どのようなパラダイムのなかで解釈されてきたのかを検証する必要がある。さらにその同性愛をめぐる状況と照らして、『翼』を「ホモセクシュアルの少年のカミングアウト小説」とみなすこれまでの解釈に留保をつける必要があることを指摘する(第2章)。そして、『翼』のテクストを検討し、この小説における同性愛とは「新しい人間」の構想のなかに位置付けられることを示す(第3章)。さらに、クズミンから影響をうけた女性向け大衆小説の女性作家ナグロツカヤのテクストを読み解き、同性愛の描かれ方の変遷を追っていこう(第4章)。

1. 20世紀初頭のロシアにおける同性愛をめぐるふたつのパラダイム

われわれがはじめに行うべきは、20世紀初頭のロシアにおける交錯した同性愛の言説を整理し、作品を読解するうえで必要となるフレームワークを準備することだ。というのも、同性愛の捉え方は時代や地域、社会状況によっておおきく異なっており、研究対象の背景にあるコンテクストを正確に捉える必要があるからだ。とりわけ20世紀初頭のロシアでは、西欧からの性科学と、「新しい人間」の構想をめぐるロシアの反実証主義的な宗教思想を基盤とした性愛論、という異なるディスクールが並存している。したがって、このふたつのパラダイムのちがいに無関心であることは、作品の読解や評価の躓きの石となりえるのだ(詳細は第2章で指摘する)。もちろん、このふたつの言説は実際にはしばしば混交し合いながら展開してくのであり、明確に二分することはできない。したがって性科学と性愛論という区分は、論を進めるうえでの類型的なものであり、ある作品が特定の言説のみに収斂してしまうという意味ではないことは強調しておきたい。

1.1 性科学のパラダイム

この時代のロシアにおいて、同性愛は性科学のパラダイムに依拠して解釈されつつあった。性科学とは、動物学、医学、心理学、生理学などの専門家が担い手となり、おもに異性愛から外れた性のあり方を研究の対象とした横断的学問である。性科学は逸脱した性のあり方を管理し、その原因を探すことに腐心したが、子孫を残す異性愛を頂点とし、それ以外の性愛を劣ったものとして序列化するため、多分にイデオロギー性を孕んだ知であっ

た。

この性科学の発展を支え正当性を与えたのは、世紀末のヨーロッパを席巻していた変質論(degeneration theory)であると考えられる。変質論は、旧約聖書に端を発する文明の進歩にたいする堕落や退廃という概念をベースに、精神医学、人類学、性科学といったさまざまな学問の言説のなかに取り込み、特定の人々（同性愛者、犯罪者、精神病者)を「変質」という社会生物学的用語によって囲い込む考え方であった。つまり変質論とは、本論の関心に引き付けて述べるなら、同性愛は文明社会の進歩を妨害し退廃させるものである異常な社会因子であるから社会から排除しなければならない、という規範から外れた性を排除するための説明様式であり、その時代において支配的な言説であるマスターナラティヴのひとつであったといえよう。変質論は一般に、19世紀中葉のフランスで生まれたとされるが、その後一気にヨーロッパ全土に広がっていくこととなる。この背景には、均質な国民を有する国民国家統合のために、急速な都市化による人々の社会不安を利用し、国内に「内なる他者」をつくり、疎外しようとするナショナルな欲望があった[(8)]。

19世紀後半の西欧では性科学や精神病理学の勃興によって、「セクシュアリティ」という性的対象の選択を個人の内面や人格と結びつけた概念が発明される。「ホモセクシュアル」という概念もセクシュアリティの発明とともに現れた。さらにこの「ホモセクシュアル」という概念は、他の西欧諸国にやや遅れをとりながら、19世紀末から20世紀初頭にかけてロシアで受容されることとなる。

デビット・ハルプリンがすでに指摘しているように、19世紀以前の西欧において男性同士の性関係は、数ある「性的倒錯」のうちのひとつに過ぎず、他の性規範からの逸脱とは明確に区別されていなかった[(9)]。また男性同性愛は「ソドミー」として禁じられることはあったが、その禁を犯した者は行為が法的に罰せられるに過ぎず、「同性愛者」という主体や人格は存在しなかった。しかしながら19世紀以降のドイツや英国を中心に発展していった性科学によって、同性愛の心理学的・精神医学的範疇が形成され男性の同性への性的欲望は個人の内部に組み込まれることになり、ひとつの人格としての「同性愛者」が誕生することになった[(10)]。魚住洋一のことばを借りて端的に述べるならば「同性愛的行為をなすことと同性愛者であることは異なったこと[傍点原文]」[(11)]であったのだ。

「同性愛者」の誕生をとくに象徴するのが、1869年にハンガリーの作家カール・マリア・

(8) 宮崎かすみ「変質論とヨーロッパの内なる他者」『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ：人文科学』6号、2004年、113–116頁。

(9) デイヴィッド・M・ハルプリン著、石塚浩司訳『同性愛の百年間：ギリシア的愛について』法政大学出版局、1995年、27–28頁。

(10) ミシェル・フーコー著、渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ：知への意志』新潮社、1986年、55–57頁；ジェフリー・ウィークス著、上野千鶴子監訳『セクシュアリティ』河出書房新社、1996年、50–51頁。

(11) 魚住洋一「同性愛者の〈誕生〉：アイデンティティとセクシュアリティ」『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』57号、2013年、6頁。

ベンケルトによって、これまでたんなる行為としてしか認知されていなかった同性間の性愛に、はじめて「ホモセクシュアル」という名前が与えられたことだろう[12]。他にもたとえば、オットー・ヴァイニンガーやリヒャルト・フォン・クラフト＝エビング、ジークムント・フロイトたちは、性科学の用語によって「同性愛者」に関してその原因や特質について多くを語った。かくして、19世紀後半において科学の名のもとに同性愛者をめぐる言説が多く産出されることになった。ここに、行為から人格への同性愛にたいする大きなパラダイム・シフトがみられる。

ロシアに性科学の言説がもたらされるのは、およそ19世紀末であった。ここではロシアにおける男性同性愛の歴史をごく簡単に確認しながら、性科学の言説を受容する過程をみていきたい[13]。1917年の革命以前のロシアにおいて、男性間の性行為がはじめて世俗の法的処分の対象となったのは1706年の軍法規定上であり、これはピョートル大帝による西欧化政策の一環としてであった。その後の1832年には、処分の対象は、大衆一般にまで拡大された。刑法の995項では、男性間の性行為が禁止され、違反した者にはシベリアへの流刑と教会での懺悔行が課された。とはいえこの時点では、男性同性愛は罰則の対象であったが、人格としての「同性愛者」とはみなされていなかった。

その後1890年前後から、同性愛を治療の対象とし精神疾患とみなす動きがあった。当時のロシアにおいて、同性愛を医学的パラダイムのなかに位置付けようとした典型例として、ヴェニアミーン・タルノフスキーの『性的感覚の倒錯』[14](1885)が挙げられる。この文献は、医師や法学者のために著された同性愛に関する指南書であり、同性愛は遺伝性によるものか否かに大別され論が進められる。タルノフスキーはここで自説の論拠として、クラフト＝エビング、ロンブローゾ、シャルコー、マニャンといった西欧の性科学者・医学者たちの名を挙げており[15]、西欧の性科学の影響が明白にうかがえる。ここでは同性愛は先天的な発達の欠陥や神経症、精神的な倒錯といったことばで語られており、同性愛を個人の発達や器質へと還元する言説が溢れている。

20世紀に入り、男性同性愛を宗教上の罪としてではなく、医学の視線に基づいた「病気」とみなす動きはさらに加速していく。とくに影響力をもったのは、1902年に作家ナボコフの父である法学者ウラジーミル・ナボコフが展開した同性愛の脱犯罪化をめぐる議論であろう。ナボコフの議論は、クラフト＝エビングの影響を受けつつ、同性愛は先天的・生得

(12) Jeffrey Weeks, *Coming Out: Homosexual Politics in Britain from the Nineteenth Century to the Present* (London: Quartet, 1990), p. 3.

(13) ロシアにおける同性愛の歴史については、以下の文献を参照した。Simon Karlinsky “Russia’s Gay Literature and Culture: The Impact of the October Revolution,” in Martin Bauml Duberman et al., eds., *Hidden from History: Reclaiming the Gay and Lesbian Past* (New York: New American Library, 1989), pp. 347–364; *Кон И.С.* Лики и маски однополой любви: лунный свет на заре. М., 1998. С. 290–292.

(14) *Тарновский В.М.* Извращение полового чувства: судебно-психиатрический очерк. СПб., 1885.

(15) Там же. С. 1.

的なものなのか、あるいは後天的なものなのかという医学や生理学の分野での論争を背景[16]に、同性愛をめぐる議論が宗教的・道徳的レヴェルから医学的レヴェルへと移行したことを示すものであろう。ナボコフの影響もあり、1903年の新しい刑法では同性愛の罰則が禁固三ヶ月以上へと緩められ、さらにはこの法律は事実上運用されることはなかった。とはいえ、同性愛の脱犯罪化の実現は1917年を待たねばならなかった。

このようにみてくると、ロシアでは、男性間の性行為は法的レヴェルでの罰則の対象であったが、19世紀末ごろからは性科学や病理学の流入によって男性同性士で性行為をおこなう者は精神的な逸脱者として囲い込まれることとなったのがわかる。ここに西欧同様、同性愛はたんなる行為から個人へ帰属するものへと変容していく様を見てとることができよう。

1.2 ロシア性愛思想のパラダイム：「新しい人間」をめぐるユートピアの構想

イギリスやドイツ、フランスといった西欧諸国から流入してきた性科学と並んで、ロシアには、反実証主義的な宗教思想に立脚した性愛思想が存在した。とりわけ、真理にかかわる一切を包括しようとする「全一性の哲学」[17]と呼ばれるソロヴィヨフの思想や、性と宗教とを同一の本質の別の側面ととらえ性愛について広く論じたローザノフの哲学は、当時の性科学とは一線を画しており、独特の性愛思想を形づくった。こうした「銀の時代」の性愛思想は、「新しい人間という両性具有の真のユートピア」[18]を追求する試みであった。すなわち、こうした思想にはキリスト教的性規範の再考、「産む性」としての女性への嫌悪、身体そのものの変革――生殖＝再生産から離脱した「新しい人間」の構想を含んでいた。そして同性間の性愛もまた、こうしたまだ見ぬユートピアの構想のなかに位置付けられるだろう。

ここでは、こうした思想家たちの性愛論を「新しい人間」という概念を中心にすえて、本論との関わりに絞って跡付けていこう。というのも、「新しい人間」ということばは世紀転換期の言論の場においてしばしば使用されており、さらに『翼』のなかにも登場しており、この時代の言説や作品を読み解くうえでのキー概念であるからだ。

「新しい人間」という概念をいちはやく提示したのは、チェルヌイシェフスキーの『何をなすべきか』(1863)である。この小説には、「新しい人間たちの物語から」という副題が付されており、まさしく「新しい人間」を扱った書物である。『何をなすべきか』では、主人公の女性ベーラはロプモーフの手により旧態依然とした両親のもとから、結婚という手段に

(16) *Набоков В.Д.* Плотские преступления по проекту уголовного уложения // Избранное (Юристы, изменившие право, государство и общество). М., 2015. С. 110–111.

(17) 桑野隆『20世紀ロシア思想：宗教・革命・言語』岩波書店、2017年、28頁。

(18) Michel Niqueux,“Le mythe de l’androgyne dans la modernité russe,” Centre d’études Slaves André Lirondelle ed., *La femme dans la modernité* (Lyon: Université Jean-moulin, 2002), p. 142.

よって救出される。やがて、ロプモーフの友人キルサーノフもこのふたりの関係に加わり、三者による親密な関係が築かれる。しかしこの関係は、従来の男女の三角関係のような性愛を媒介としたものではなく、友愛の原理にもとづいたものであった。かくして、生殖＝再生産を前提とした異性愛による二者の結びつきを排し、女性ひとりと男性ふたりによる、友愛にもとづく結合、すなわち「三者の結婚」(19)というあらたな親密性のあり方をチェルヌィシェフスキーは示したのだ。チェルヌィシェフスキーの「新しい人間」をめぐる生殖を排したユートピアのヴィジョンは、オリガ・マティッチが「大きな影響力をもったチェルヌィシェフスキーの急進的な小説『何をなすべきか』において形成された、1860年代の急進派の実践は、世紀転換期の反生殖の生の創造をあらかじめ示すものだった」(20)と述べるように、後の世代の世紀転換期の思想家や象徴主義の作家たちに継承されていく。

19世紀末から20世紀初頭のソロヴィヨフやローザノフらによる性愛思想は、先に述べた『何をなすべきか』にくわえ、キリスト教の性規範が抱える矛盾をめぐって展開することになる。では、そのキリスト教の性規範の矛盾とは何か。この矛盾を正面から扱ったのが、レフ・トルストイの『クロイツェル・ソナタ』(1889)であった。『クロイツェル・ソナタ』が示したキリスト教の性規範の矛盾とは、キリスト教の人類愛と性愛にもとづく生殖＝再生産（さらには、それを支える制度としての結婚）とは、相容れないということだった。『クロイツェル・ソナタ』の主人公ポズヌィシェフは、キリスト教が目指す人類の究極の目的とその妨げとなっているものについて、こう語る。

> [……]もし人類の目的が幸福や善、愛といった類のものであるなら、つまり、もし人類の目的が預言書のなかで語られているように、すべての人々が愛によって統合され、槍を打ち直して鎌とするなどといったことであるなら、いったいこの目的への到達を阻むものは何であろうか。それは情欲なのです。情欲のなかでもっとも強く邪悪で、しつこいものが性愛と肉体的愛なのです[……]。(21)

キリスト教的人類愛の実現――すなわち、すべての人々が愛によって統合されるためには、性愛や肉欲はまったく不要なものなのであるとポズヌィシェフは主張する。つまり、あらゆる性愛関係は忌避すべきものであり、たとえそれが結婚により誓われた愛であろうと、性欲や肉欲に支えられたものである限り、否定すべきものなのだ。したがってキリスト教が説く愛と、教会が管理する子孫を残すための結婚という制度はそもそも相いれないものなのである。結婚とは、人間の肉欲を生殖＝再生産のために囲い込んでいるに過ぎ

(19) 草野慶子「三人の結婚：ロシア近現代文学におけるジェンダー、セクシュアリティ」塩川伸明、小松久男、沼野充義、松井康浩編『ユーラシア世界4：公共圏と親密権』東京大学出版会、2012年、101頁。

(20) Olga Matich, *Erotic Utopia: The Decadent Imagination in Russia's Fin de Siècle* (Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 2005), p. 22.

(21) *Толстой Л.Н.* Полное собрание сочинений в 90 томах. М., 1936. Т. 27. С. 30.

ず、性交の別名である。こうして結婚制度にもとづく家庭のなかで、肉体的交接を意味する生殖＝再生産と愛という相容れないはずのふたつが一致しているという、キリスト教と教会とが抱える矛盾を『クロイツェル・ソナタ』は明らかにした。

そこでソロヴィヨフやローザノフは、『クロイツェル・ソナタ』のように性愛そのものを否定するのではなく、反対に、性愛それ自体がもつ意味を探求し、生殖＝再生産を排除した「新しい人間」のユートピアを構想する。彼らが構想するユートピアとは、両性具有である「新しい人間」たちによって創造される生殖＝再生産が存在しない世界、いいかえるならそれは、次世代を再生産する必要のない、不死なる世界であった。

ソロヴィヨフは『愛の意味』(1892–1894)のなかで、性愛と生殖＝再生産とを切り離したうえで、愛の究極の意味を「**エゴイズムをなくすことによって、個を正当に位置づけ救済する**[強調原文]」(22)ことにあると言った。ソロヴィヨフによればエゴイズムとは「みずからを生の中心と認めるいっぽうで［……］、他者を自己の存在の周辺へと追いやり、彼らにただ外面的で相対的な価値しか置かないこと」(23)である。すなわち自己を中心に置き、他者とのあいだに境界をもうけ、他者を周縁化するエゴイズムは人類の真理への到達を阻むのだ。そして、ただ愛のみがこの自己と他者を隔てる境界を取り去ることができる。自己と他者との境界線が消失し、「全」となったとき、そこに「新しい人間」が現れる。

> 同種であり等価の、だが外形の面で**全面的に異なっている**二者が、いわば化学的に結合したときにのみ、新しい人間(自然的意味でも精神的意味でも)の創造、真の個の現実上の出現が可能になる。このような結合、あるいは少なくともこれにもっとも近い結合を、われわれは性愛のなかに見出すのである。[強調原文](24)

ここでソロヴィヨフは、性愛による外形の面で全面的に異なっている二者(＝男女)の結合によって、「新しい人間」が創造されると述べている。この生殖によらない、あらたな男女の結びつきによる「新しい人間」とは両性具有の象徴であり、それは「存在の崩壊へと向かう分裂(肉体の死もそこに含まれる)の一切を免れた全体性の象徴であり、未来の、新しい人類の雛形」(25)であるのだ。つまり、自己と他者の境界が融解し、二者が結合した「新しい人間」＝両性具有となれば、人間は永遠の生を有し、そうした「新しい人間」たちの世界では、個体の死を前提とした生殖＝再生産は不要となる。このようにソロヴィヨフは、愛の意味を生殖＝再生産ではなく、人類の全体性の希求――「新しい人間」の創造に見出す。

(22) *Соловьев В.С.* Собрание сочинений Владимира Сергеевича Соловьева: с 3-мя портретами и автографом. Т. 7. Брюссель. 1966. С. 16.
(23) Там же. С. 17.
(24) Там же. С. 19.
(25) 草野「三人の結婚」116–117頁。

しかしソロヴィヨフは、生殖＝再生産と愛とを分離するが、同性愛に関しては否定的な見解をもっていた。というのもソロヴィヨフによれば、「同性間の友情には、お互いの性質を補い合っている形態の徹底的ちがいが不十分である」(26)からだ。すなわちソロヴィヨフが思い描く「新しい人間」とは、あくまで異性間の愛によってのみ実現しえるのだ。さらにソロヴィヨフは、「それ[同性間の友情]がとくに激しくなりでもしたら、これは性愛の不自然な代用品になってしまう」(27)とまで述べ、同性間の性愛を認めていない。

しかしいっぽうでローザノフは『月光の人々』(1911)のなかで、ソロヴィヨフと異なり、「新しい人間」像を「月光の人々」という概念によって同性愛と結びつけて論じる。したがって、「同性愛」のディスクールを追う本稿の課題に照らして、ローザノフの性愛思想はより仔細にみていく必要があるだろう。さらには、ローザノフがクズミンの『翼』を読んで衝撃を受けたという伝記的事実(28)からも、『翼』に描かれる同性愛のあり方を検討するうえで、ローザノフの性愛思想は欠かすことができない。

ローザノフは、フロイトやヴァイニンガーら西欧の性理論・性科学の影響を受けつつ『月光の人々』で、独自のエロス論を展開する。『月光の人々』では、人間の性のあり方は、以下のように数値として表される。

> 各人の「自らに固有のもの(Свое)」は、まず第一に**力**のなかに、**緊張**のなかに表現される。ここで、われわれは、連続する自然数によって適切に表現される[性の]度合の数列を得ることができる：
> …＋7＋6＋5＋4＋2＋1±0−1−2−3−4−5−6−7…［強調原文］(29)

ローザノフは、数値によって表現される流動的な性的エネルギーが人間の本質を決定すると考えている。「＋」の値が高ければ高いほど、異性にたいする渇望が高まった状態であり、「真のオス」「真のメス」であることを意味する(30)。反対に、数値が「－」に傾けば友愛の感情や同性への欲望があることを示している。ローザノフにとって、とくに問題となるのは数列の中心に位置する「±0」である。「±0」とは、性的エネルギーが収束する地点であり、肉欲とは無縁の状態である。ローザノフはこの「±0」の状態を「男性的でも女性的でもない」(31)精神状態とみなしており、これを「第三の性」や「月光の人々」と呼ぶ。マティッチによれば、ローザノフはこの「第三の性」といった概念を同性愛の意味でも使用してお

(26) *Соловьев*. Собрание сочинений Владимира Сергеевича Соловьева. С. 21.
(27) Там же.
(28) Evgenii Bershtein, “An Englishman in the Russian Bathhouse: Kuzmin’s Wings and the Russian Tradition of Homoerotic Writing,” in Lada Panova and Sarah Pratt, eds., *The Many Facts of Mikhail Kuzmin: A Miscellany* (Bloomington: Slavica Publishers, 2011), p. 81.
(29) *Розанов В.В.* Люди лунного света: Метафизика христианства. М., 1990. С. 36.
(30) Там же. С. 36.
(31) Там же. С. 197.

り[32]、「この世にはいない存在」[33]であり純粋な精神性を有する。

ローザノフは、この「第三の性」や「月光の人々」という性の無風状態(「±0」)をも「ソドミー」という語の範疇に入れている。本来「ソドミー」とは、同性愛をはじめとして自慰行為や口腔性交など「不自然な」性行為一般に使われる語であるが、ローザノフの場合「ソドミー」という語を、「－1－2－3」といった同性への欲望に加え、「±0」の状態＝「月光の人々」の意味でも用いており、「反生殖」の意味合いで使用している[34]。

注目すべきは、ローザノフが「ソドミーの本質は甘美さ、明るさ、安らぎ、統一性、そして社会性を人生のすべてに与える」[35]と述べていように、「ソドミー」は肯定的に考えられており、先に見た「ホモセクシュアル」という病理的な概念とは好対照を成している点だ。「第三の性」や「月光の人々」という概念によって表現されるソドミーの実践＝男性同士の友愛／性愛あるいは性的無関心の状態は、ポジティブなものであり、さらにはこの男性同士の連帯は秩序によって統一された世界として語られている。この点において、「ホモセクシュアル」という概念が変質論を背景に、社会全体を堕落させる存在として捉えていた点とは対照的である。

つまり、ローザノフが思い描く「ソドミー」という概念、すなわち「第三の性」や「月光の人々」とは、「同性愛者」や「ホモセクシュアル」といった概念とは異なった、文明の発展の導き手となるべき文化的優位性を有した「新しい人間」のヴィジョンであったといえる。ここまでわたしたちが跡付けてきた「新しい人間」という概念は、ローザノフにおいては「月光の人々」といいかえられているといえよう。

ローザノフによれば、「第三の性」においては決して子どもは生まれず、家庭が築かれることもない[36]。かくして、「社会生活の形式」[37]や「歴史の形式」[38]が破壊されることとなる。つまり、反生殖を示す「第三の性」や「月光の人々」は、子を為すことによる家族を基本単位とする社会や世代の継承、さらにそこから生じる歴史に関わることはない。

その代わりに、彼らには「精神的関心の爆発」[39]が生じ、視力の明瞭さ視野の拡張、高度な思考力を獲得する。したがって「次の人類の運命は、現在ある人類の利益の観点からではなく、この孤独な者たちの集団の利益の観点から、すなわち彼らの――血縁者がいないために――精神的結びつき(духовного союза)、精神的な継承と絆(духовной преемственности и связи)という観点から構想される」[40]とローザノフは述べる。ここに、

(32) Matich, *Erotic Utopia,* p. 251.
(33) *Розанов.* Люди лунного света. С. 236.
(34) 青山「ロシアの性愛論(VI)」、89頁。
(35) *Розанов*. Люди лунного света. С. 111.
(36) Там же. С.197.
(37) Там же. С. 197.
(38) Там же. С.198.
(39) Там же. С. 198.
(40) Там же. С. 198.

来るべき世界は「月光の人々」によって生殖とは無縁の高度な精神性とともに維持されるというユートピア的ヴィジョンが提示される。このように、同性愛や無性愛といった概念を広く包摂する「第三の性」や「月光の人々」、さらには「ソドミー」はローザノフのユートピア的世界観の構想――生殖を排した純に精神的なつながり――のなかに位置付けられる。この肉欲とは無縁の純粋な精神性を志向する「月光の人々」という概念は、男女の交接を中心とした性的なるものや肉体的なものから離脱し、文化や芸術の創造に専心することによりあらたな文明の導き手となるという考えであり、『月光の人々』の出版に先行する『翼』の「新しい人間」観や、女性は肉欲を喚起させるものとして排除する同時代のディスクールと共鳴しあうことになる。

2. 問題の所在：『翼』の解釈をめぐって

ここでは、『翼』をめぐる先行研究から、この小説が「ホモセクシュアル」や「カミングアウト」といった性科学に基づいた語彙によって解釈されてきたことを示そう。その上で、こうした読解がテクストに照らして、必ずしも妥当であるとはいえないことを明らかにしたい。

『翼』はロシア文学において、ホモセクシュアルのテーマを明示的に描いた作品として一般に知られており、ロシア文学史においてはじめて同性愛を明確に描いた作品であるとする見解も存在する(41)。これまで『翼』をめぐっては、テクストを作家個人の伝記的事実――クズミンの海外体験、同性である男性と親密な関係にあったことなど――とを照らし合わせた分析(42)、プラトンの『パイドロス』を中心としたギリシア哲学と関連づけた思想史の観点からの研究(43)、同時代のシンボリズムやモダニズムの潮流と関連付けつつ作品を読解した文学史的研究(44)などがある。また『翼』は、1980年代以降の欧米圏で成熟を迎えたジェンダー批評、クィア批評、さらには性的少数者の権利擁護を目指す現代の「LGBT」アクティビズムのなかでもしばしば言及されてきた(45)。というのも、この作品がロシア文学史において、早い時期に男性同性愛関係を描いた作品であるとみなされているため、ロシア文学研究のみならず、ジェンダー／セクシュアリティ研究の観点からみても文化的含意に富

(41) Bershtein, “An Englishman in the Russian Bathhouse,” p. 75; 中尾泰子「アマゾンの愛Ⅱ：ジノヴィエワ＝アンニバルとパルノークにおけるレズビアニズム」『文学研究論集』15号、1998年、83頁。

(42) *Богомолов Н.А.* Автобиографическое начало в раннем творчестве Кузмина // Михаил Кузмин: статьи и материалы. М., 1995. С. 117–150. とくに『翼』に関する分析はC. 122–124.

(43) Donald C. Gillis, “The Platonic Theme in Kuzmin's Wings,” *The Slavic and East European Journal* 22, no. 3 (Autumn, 1978), p.336–347.

(44) *Антипина И.В.* Концепция человека в ранней прозе Михаила Кузмина: дис. ... канд. филол. наук. Воронеж, 2003. とくに、『翼』についてはC. 29–87.

(45) Simon Karlinsky, “Russia’s Gay Literature and Culture,” pp. 172–174; *Бреева Т.Н.* Гендерное конструирование в романе М. Кузмина «Крылья» // Филология и культура. 2016. № 2. С. 199–204; *Кирсанов В.* 69: Русские геи, лесбиянки, бисексуалы и транссексуалы. М., 2007. С. 212–216など。

んだテクストであるからだ。

まずは『翼』について、筋を追ってみよう。16歳の少年ヴァーニャは、母の死後、従兄であるニコライとともにペテルブルクへやって来る。そこで出会ったラリオン・シュトルプのサロンに出入りするようになり、彼に好意を寄せる。しかし、シュトルプが男娼フョードルと関係を持っていたこと、さらにシュトルプと交友のあったとされる女性イーダの自殺にシュトルプが関与していたことに、ヴァーニャは深い衝撃を受ける。その後ヴァーニャは、ヴォルガ湖畔の田舎町でさまざまな人物との対話や省察を経た後、ペテルブルクのギムナジウムでギリシア語を教わっていたダニエルと偶然にも再会する。ダニエルの提案で、ふたりはイタリアへと渡る。イタリアでヴァーニャはシュトルプと再会し、彼と今後の人生をともにすることを決意し、物語は幕を閉じる。

『翼』に関する先行研究の多くに共通するのは、主人公ヴァーニャが「カミングアウト」という他者へのセクシュアリティの開示を経て、「ホモセクシュアル」としてのアイデンティティを獲得する小説であるという前提のもとで、議論がすすめられている点にある。「ホモセクシュアル」という概念は、すでに確認したように、19世紀に西欧で勃興した性科学によってもたらされたものであり、『翼』をセクソロジーのフレームワークで捉えた解釈といってよい。

たとえばエヴゲーニー・ベルシュテインは、クズミンの『翼』を「カミングアウト小説(coming-out novel)」(46)とみなしている。この場合、カミングアウトとは秘匿した自らのセクシュアリティ、すなわちホモセクシュアルであることを周囲に開示することによって、自らの「同性愛者」としての社会的な立場を確保することを意味している。ベルシュテインによれば、「カミングアウト小説」とは、主人公の成長の過程を描いた教養小説(ビルドゥングスロマン)の一形態である。『翼』においては、主人公の同性愛をめぐる問題や葛藤が、おもに社会的問題や発達的問題として扱われ、最終的に主人公ヴァーニャが自己のアイデンティティ（＝「ホモセクシュアル」であること）を受け入れることを通してこの葛藤が解決される(47)。

カミングアウトという行為は、「ホモセクシュアル」という概念と表裏一体の関係にあるといってよいだろう。というのも、カミングアウトとは同性愛という自らの根底にある真理＝アイデンティティを、外に開示することで成立するからだ。したがって、同性愛をたんなる行為としてではなく、個人の存立にも関わるアイデンティティの核となる概念として捉える性科学のパラダイムなしに、カミングアウトは成立しえないのである。すなわち、性的欲望のひとつの形態であった同性への欲望が、性科学によって生み出されたセクシュアリティという「個々人の人間的性質において、もっとも深奥部」(48)として構成され、

(46) Bershtein, “An Englishman in the Russian Bathhouse,” p. 83.
(47) *Ibid*.
(48) ハルプリン『同性愛の百年間』、46頁。

同性愛者の内面なるものが発明されることで、カミングアウトが可能になるのである。あるいは反対に、フーコーが述べるように、カミングアウトすなわち「告白」という行為を通して、「ホモセクシュアル」という主体が構築されるといえるかもしれない[(49)]。いずれにせよ、このカミングアウトという行為とホモセクシュアルという言葉によって立ち上げられる「同性愛者」という主体とのあいだには緊密な関係がある。

『翼』を、ベルシュテインの述べる「カミングアウト小説」とする見解は他の先行研究にも多くみられる。たとえばフランツ・シンドレルは、『翼』をヘテロセクシャルからホモセクシャルへの、すなわち「いわゆるカミングアウト (coming out) の過程」[(50)]であると解釈している。同様にシモン・カルリンスキーの「ゆっくりと、自らがホモセクシュアルであることを理解する若い青年の物語だ」[(51)]という指摘や、ジョン・マルムスタードの「彼[ヴァーニャ]は自身の本質的(ホモセクシュアルとしての)自己に思い至る」[(52)]という指摘も、同性間の親密な関係のあらわれを「ホモセクシュアル」という一個人の人格＝本質へと収斂させてしまう近代的セクソロジーのパラダイムに拠った解釈の典型例といえよう[(53)]。

しかしながら筆者は、『翼』を性科学のパラダイムに依拠した「カミングアウト小説」や「ホモセクシャル」の少年の物語であるとする解釈には首肯し難い。というのも、『翼』はホモセクシュアルという確固としたアイデンティティや、それを成立させるためのセクシュアリティの他者への告白＝カミングアウト、さらには自身が男性を欲望するという主人公の自己認識を示唆する場面を欠いているからだ。そればかりか、主人公が男性にたいして性的感情を抱いているのかさえ、きわめて曖昧なのだ。この点について、『翼』をホモセクセクシュアルというタブーを描いた猥雑な作品であるという当時の批評にたいする、マルムスタードの疑義はわれわれにとって重要である。マルムスタードは先述したように、最終的には『翼』を主人公の少年「本質的(ホモセクシュアルの)自己」の実現と解釈してしまうのだが、以下の指摘についてはわれわれと問題意識を共有している。

> 男性間の接吻はいうまでもなく、抱擁さえ描かれておらず [……]、また「ホモセクシュアル」ということばさえ現れない[……]この小説において、同性愛を大胆に描いたことを除いて、

(49) フーコーは、告白すなわち自分自身の真理をめぐる言説と、性科学とが密接に関連していたと指摘している。フーコー『性の歴史 I 』、84 頁。

(50) *Шиндлер Ф.* Отражение гомосексуального опыта в «Крыльях» М. А. Кузмина in Leonid Heller ed. *Amour et érotisme dans la littérature russe du XXe siècle* (Bern: Peter Lang, 1992), p. 60.

(51) Karlinsky, “Russia’s Gay Literature and Culture,” p. 172.

(52) John E. Malmstad, “Bathhouses, Hustlers, and a Sex Club: The Reception of Mikhail Kuzmin's Wings,” *Journal of the History of Sexuality* 9, no. 1/2 (2000), p. 97.

(53) ボゴモロフも同様に、『翼』には「ホモセクシュアル」が描かれていると指摘している。*Богомолов*. Автобиографическое начало в раннем творчестве Кузмина. С. 122). 日本においても、たとえば中尾泰子は、この小説を「ロシアで最初の『ホモセクシュアル小説』」として紹介し、セクソロジーの文脈に位置付けようとしている。中尾「アマゾンの愛 II 」、83 頁。

批評家たちは作品の何を「自己顕示的」、あるいは「猥雑」と思ったのだろうか。(54)

ここでは、『翼』は接吻や抱擁といった男性同性愛を明確に示す場面や描写を欠いており、その性愛のあり方はきわめて曖昧なものであることが示唆されている。たしかにこの小説には、男性の相手をするフョードルという男娼が登場するため、その点において「同性愛を大胆に描いた」といえるかもしれない。しかしながら、男性間の性愛を示唆する描写に乏しく、ヴァーニャが同性愛者であるとする解釈へ至るに十分な根拠が示されていないように思われる。

以上のような『翼』の解釈にたいする違和感は、先行研究が、ロシアにおいて同性愛がどのようなパラダイムによって把握されていたのか、端的に言い換えるなら、同性愛にたしてどのような視線が向けられていたのかについて十分に注意を払っていないことに起因すると考えられる。第1章で指摘したように、20世紀のロシアには性科学のパラダイムと併存して、あるいはその影響を受けつつ、「第三の性」や「月光の人々」といった概念に代表されるような性愛観が存在した。したがってわれわれは、クズミンがどちらのパラダイムに依拠して、同性愛(あるいは、男性同士の友愛)を描いたのかを見定める必要がある。この点については次章の課題であるが、クズミンは性科学とは明らかに距離を置き、のちにローザノフが提唱する「月光の人々」といったロシアの性愛思想に立脚した「新しい人間」観にきわめて近い立ち位置にいたと思われる。

3.『翼』を読む

前章では、『翼』を性科学のパラダイムに立脚したホモセクシュアルのカミングアウト小説とみなすことに疑義を唱えた。本章では、具体的なテクストを検討しながら『翼』における同性愛とは、女性嫌悪をともなった「新しい人間」へと至る手段として位置付けられるものであり、性科学のパラダイムとは異なった、ソロヴィヨフやローザノフらの性愛思想と多くの点で共通した認識をもっていることを明らかにしていく。

『翼』の作者であるクズミンは、もともとは作曲家を志し楽曲も発表していたが、1906年の『天秤座』に掲載された『アレクサンドリアの歌』によって、当時『天秤座』の編集をおこなっていたブリューソフに見いだされ、作家としての地位も築く。『アレクサンドリアの歌』や本稿で取り上げる『翼』といった初期の作品は、デカダン派の作風に近い。クズミンは文学史においては、表現の明晰さや形式の堅固さを志向するアクメイズムの先駆けとされている(55)。このようにクズミンは、いわば「高級」な文学ジャンルに属する作家であるが、

(54) Malmstad, “Bathhouses, Hustlers, and a Sex Club,” p. 92.

(55) クズミンのバイオグラフィや一般的評価はFarida A. Tcherkassova, “Mikhail Alekseevich Kuzmin,” in Judith E. Kalb and J. Alexander Ogden eds., *Russian writers of the Silver Age, 1890–1925* (Detroit : Gale, 2004), pp. 256–257; 川端香男里編『ロシア文学史』東京大学出版会、1986年、280–281頁を参照。

『翼』はセンセーションを呼び、作品の猥雑さを批判する声も相次いだ[56]。またこれまでの伝記的研究によって、クズミンの性的指向が男性に向いており、同性のパートナーが存在したことが明らかになっている[57]。

3.1『翼』における「新しい人間」のヴィジョンと女性嫌悪

ここでは、20世紀初頭に活発に議論されていた「新しい人間」をめぐる構想が『翼』では、どのようなものとして捉えられていたのかをみていきたい。というのも、翼における「新しい人間」のヴィジョンは、『翼』の主題ともいえる男性間の友愛／性愛と密接に関連しているからだ。

『翼』における「新しい人間」とは、生殖を排した美を追求する男性間の親密な関係性のなかで築かれるものであり、それは同時に女性嫌悪をともなっていた。物語の序盤、シュトルプはギリシア語を勉強しているヴァーニャに話しかけ、「私が思うに、君には、ヴァーニャ、真の新しい人間(настоящим новым человеком)になる素質があるよ」[58]と述べる。ここでは、ギリシア世界の文化に親しむことによって「新しい人間」になれることが示唆されるが、この時点ではその内実は明らかではない。しかし、この「新しい人間」については、のちにシュトルプの口から語られることになる。

「新しい人間」をめぐるシュトルプの考えは、ヴァーニャがシュトルプの主宰する男性だけのサロンを訪れた際により明確になる。シュトルプはサロンにおいて「わたしたちは古代ギリシア人だ、ユダヤ人の偏狭な一神教、[……]彼らの[……]肉、子孫、種への執着とは無関係である」[59]と宣言する。ここでは、一神教のユダヤ・キリスト教的世界が批判的に語られている。

われわれにとって重要なのは、「肉」「子孫」「種」という生殖＝再生産にかかわる事柄が、嫌悪されるものとみなされている点だ。肉欲にもとづく性交、子を為すこと、世代の継承――これらはすべて、現世における個体の死を前提としており、彼らが求める「新しい人間」たち、すなわちシュトルプが思い描く「美を追い求める者、来るべき世のバッカスたち」[60]の世界とは相容れないものなのだ。クズミンの思い描くギリシア的世界観に基づいた「新しい人間」は不死なる存在への志向を有している。

生殖＝再生産への嫌悪にもとづく、「新しい人間」の世界の構想というユートピア的ヴィジョンに貫かれたテクストにおいて、女性たちが否定的に描かれ、排除されるのは必然で

(56)『翼』をめぐる作家や批評家たちの反応は Malmstad, “Bathhouses, Hustlers, and a Sex Club: The Reception of Mikhail Kuzmin's Wings,” に詳しい。

(57) *Богомолов Н.А., Малмстад Д.Э.* Михаил Кузмин. М., 2013. С. 18.

(58) *Кузмин*. Плавающие путешествующие. С. 51.

(59) Там же. С. 62.

(60) Там же. С. 62.

ある。というのも、20世紀初頭のロシアでは種の再生産と個体の死という生殖＝再生産と女性とを結びつけ、この女性性を忌み嫌うべきものとして排除する言説が存在したと考えられるからだ(61)。したがって、中尾泰子が「嫉妬に狂う醜悪な女性を登場させるなど、ある種の『女性嫌悪』とも呼ぶべき視線が挟み込まれており、上流階級に属する男性同士のコミュニティの審美的側面がいやがうえにも強調されている」(62)と指摘するように、女性を蔑み排除することにより、女性との性的関係を持とうしない男性たちの友愛／性愛を媒介としたコミュニティが構築されていくこととなる。

たとえば、ヴァーニャが身を寄せる家の娘ナターリャは、物語の冒頭で三人称の語り手によって「顔中がそばかすだらけで、下品にすこし腫れた口、赤毛で、何か答える時は、ブルカを口いっぱいに含んでいる」(63)と、醜く不作法な様子が描写され、さらにヴァーニャはナターリャについて「彼女はおそろしく不快でカエルみたいだ」(64)と罵る。また彼女が、シュトルプにたいして好意を抱いていることを知った後には、「ヴァーニャは、なんだか突然老け込んだような彼女を、敵意をもって見た／娘はいくらか皮膚がたるんでおり、口は腫れ、今やそばかすと密集した茶色のシミは区別がつかなくなり、赤毛の髪はボサボサだ」(65)と、ことさらに身体の醜さと生々しさが強調される。このように、シュトルプに好意を寄せることで、ヴァーニャとシュトルプとの友愛／性愛関係を乱す女性は醜悪な身体と結びつけられ、主人公であるヴァーニャにとっては一貫して嫌悪されるべき対象として描かれていることがわかる。

同様にヴァーニャの良き相談相手であったマリアも、彼にたいして好意を寄せ「ヴァーニャを抱擁し彼の口や目、頬に接吻をし始め、より一層強く彼を自分の胸に押し付け」(66)、さらには「ヴァーニャ、わたしの坊や、わたしの愛する人」(67)とささやく。しかしこれに、ヴァーニャは「ぼくを放っておいてくれ、不快な女」(68)と露骨に不快感を示す。またこのマリアの行動がひとつの原因となって、ヴァーニャは彼女が住むヴォルガ湖畔を離れ、ローマへ行き、一度は離れたシュトルプと再会する。ここで、マリアの求愛とそれにたいする嫌悪感というミソジニーは、ヴァーニャはシュトルプと再開し、彼と人生を歩むという大団円(＝「新しい人間」の誕生)へとプロットが進行する動機付けとして機能している。し

(61) 筆者は以前に、「スチヒーヤ」という概念を手掛かりに、この点について考察した。詳しくは、安野直「ロシア女性大衆小説における『新しい女性』のヴィジョン：エヴドキヤ・ナグロツカヤ『ディオニュソスの怒り』をめぐって」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』63輯、2018年、358–361頁を参照。

(62) 中尾泰子「ツヴェターエワとレズビアニズム：『女友だち』から『アマゾンへの手紙』まで」『ロシア語ロシア文学研究』31号、1999年、122頁。

(63) *Кузмин*. Плавающие путешествующие. С. 46.

(64) Там же. С. 57.

(65) Там же. С. 84.

(66) Там же. С. 88.

(67) Там же. С. 88.

(68) Там же. С. 88.

たがって、この小説では描写とプロット進行の双方の面で、女性にたいする嫌悪の視線と、男性同士の親密なつながりとは密接不可分な関係にあることがわかる。

こうした女性性を嫌悪の対象として棄却し、ユートピアに至ろうとする志向は『翼』のみならず、すでにみたように20世紀初頭のロシアの言論――とりわけ、ソロヴィヨフの思想のなかにしばしばみられる。クリスティ・エコーネンが「ソロヴィヨフの考えでは、子を為すことは、人間が死すべき運命の証明である」(69)と指摘するように、永遠の生を有した「新しい人間」たちの不死なるユートピアに至るためには、個の死を前提とした類の再生産という「自然」から逃れる必要があるという考えが、当時のロシアの性愛思想のなかにみられたようだ(70)。このことを裏付けるように、19世紀末から20世紀初頭のロシア文化史における「自然」と人間とのかかわりについて、エプシュテインは以下のように指摘する。

> ロシア文学においてはじめて自然が人間よりも取るに足らず、微弱なものになりつつある――人間は自然を見下し、みずからの知力、理想の偉大さに陶酔している。19世紀から20世紀への転換期には都市、技術、産業の文明が急速に発展するが、こうした文明はあたかも自然と勢力争いをおこない、また同時に自然に援助の手を差し伸べているようだ。(71)

このような、都市化、産業化による、自然と人間や文化との関係の変質――文明による自然の統御・支配――は、容易に女性と男性の関係性のアナロジーへと読み替えられる。自然は生殖＝再生産を想起させる母としての女性性と恣意的に結びつけられ、理性的な男性＝文明によって統御されるべきだという、女性蔑視をともなった男女の序列化された関係の言説が構築されることになる(72)。

かくして、『翼』に描かれる男性同士の絆と女性排除は、20世紀初頭のこうした性愛思想の言説ときわめて近い関係にあるといえそうだ。したがって、この女性を排除した男性同士の親密な関係、不死なるユートピアの志向は、「ホモセクシュアル」という男性間の性愛関係を異常なものとして囲い込んだ医学的言説からは明確に区別される。

とはいえ、クズミンが性愛思想のパラダイムのみに傾倒し、性科学のような医学的言説を無視していたというわけではない。『翼』のなかでは、クズミンが意識的に性科学の言説に言及していると思われる箇所がみられるのだ。それは、男性同性愛に関する、サロンでのシュトルプの「そして、『それは不自然だ』と言われるなら、そのように言った盲者を一瞥し、無視するのがよい、菜園の案山子から飛び去るツバメのようにならないように」(73)

(69) *Эконен К.* Творец, субъект, женщина: Стратегии женского письма в русском символизме. М., 2011. С. 88.

(70) *Эконен* Творец, субъект, женщина. С. 89–90; Eric Naiman, “Historectomies: On the Metaphysics of Reproduction in a Utopian Age,” in Jane T. Costlow et al., eds., *Sexuality and the Body in Russian Culture* (Palo Alto: Stanford University Press, 1993), p. 256.

(71) *Эпштейн М.Н.* Природа, мир, тайник веселенной: Система пейзажных образов в русской поэзии. М., 1990. С. 28.

(72) Naiman, “Historectomies,”p. 262.

(73) *Кузмин*. Плавающие путешествующие. С. 62.

という発言のうちに読み取ることができる。ここでの「不自然」とは「自然の法」(74)からの逸脱を指しているが、――「アンチ・ホモセクシュアルの議論」(75)とワットンが指摘しているように――、当時の性科学において不自然なものとして医学的に囲い込まれ成立した「ホモセクシュアル」という概念を示唆していることは明らかであろう。このシュトルプのセリフには、当時社会を席巻していた性科学の考え方が表われており、性愛思想と性科学とが『翼』のなかで併存し、そのうえで性科学が退けられている様子をみてとれる。われわれはここに、シュトルプが同性愛を不自然な性愛の形態とする性科学の言説とはあえて距離を置き、ギリシア的世界を模した男性同士のつながりのなかに「新しい人間」のヴィジョンを見出そうとする姿勢を読み取ることができるのではないだろうか。

3.2『翼』における身体をめぐるナラティブ

前節では、『翼』における「新しい人間」が、女性や生殖を排した男性同士のコミュニティのなかで構想されていたことを、読み取ってきた。ここでは、この「新しい人間」へと至るヴァーニャの変化が作品テクストのなかでどのように描かれているのかを、彼の身体をめぐるナラティブを追いつつ、検討していきたい。

『翼』では、ギリシア神話やプラトン哲学に関するさまざまなモチーフをいたる箇所にちりばめつつ、少年ヴァーニャの年長の男性にたいする欲望とそれをめぐる内的省察が展開される。なかでも、メインプロットである少年の成長は、ナルキッソスの神話のモチーフ(76)とプラトンの『パイドロス』における翼とイデアをめぐる概念を下敷きとしている。こうした文化的含意を手掛かりにして読解することによって、「ホモセクシュアルの少年のカミングアウト」というこれまでしばしば語られてきた見解とはちがった『翼』の一面が明らかになるだろう。

『翼』のなかでは幾度か主人公ヴァーニャの鏡に映った身体が描かれるが、このヴァーニャの身体は作品を読み解くうえで重要なキーとなる。というのも、ドナルド・ギリスが「これらの啓示的な鏡は彼の心身の特質を映し出している」(77)と指摘するように、鏡に映されるヴァーニャの身体は、彼の精神の変容、ひいてはシュトルプが構想する美的ユートピアへの参入と「新しい人間」への変容を示すものであるからだ。

物語の冒頭、従兄弟とともにサンクトペテルブルクにやって来たヴァーニャは、偶然シュトルプの姿を目にする。その直後、ヴァーニャの身体は鏡を通して以下のように描写される。

(74) Там же.
(75) Watton,“Constructs of Sin and Sodom in Russian Modernism, 1906–1909,” p. 389.
(76) *Бреева*. Гендерное конструирование в романе М. Кузмина «Крылья». С. 201.
(77) Gillis, “The Platonic Theme in Kuzmin's Wings,” p. 336.

> 壁の小さな鏡に映った自分の姿を見ながら、彼[ヴァーニャ]はやや紅潮した特徴のない丸い顔、大きな灰色の眼、整っているが、まだ子どもっぽく少しふくれた口、そして短く刈り込まれておらず、かるくカールした明るい髪に視線を向けた。彼は薄い眉の黒いシャツを着たこの背の高く、繊細な少年のことが好きというわけでも、嫌いというわけでもなかった。(78)

ここでは、シュトルプを目にしたヴァーニャの淡い感情とともに、自らの容貌や少年らしさ、またそれを肯定的に評価できない様子が描かれる。その後も「彼はまた、鏡に映った灰色の眼と薄い眉毛の赤らんだ顔を見た」(79)と反復して語られ、鏡に映ったヴァーニャの姿が読者に印象づけられる。

次に着目したいのは、ヴァーニャが友人サーシャとヴォルガ川で水浴びをする場面である。シュトルプへの名づけ得ぬ感情とともにヴァーニャは「新しい人間」をめぐる教えを受けるが、ヴァーニャの変化は第二部のヴォルガの水面に映ったヴァーニャの姿のなかに見てとることができる。川での水浴びのさいに、サーシャから「なんて体格がいいんだ、ヴァーニャ」(80)と称賛されるヴァーニャは自身の身体に目をやる。

> 彼は波紋で波立っている水面に映った、水浴びにより日焼けした長身でしなやかな肉体、細い太ももと長くがっちりした脚、うすい頬にかかるくらいにのびた巻き毛、丸くやせた顔と大きな目といった自分の姿を見た――そしてだまって微笑んで、冷たい水へと入った。(81)

ここでは、先に挙げた作品冒頭での自身の未成熟な身体への不満とは対照的に、自身のしなやかであり、逞しい成熟した身体に恍惚とするヴァーニャのナルシシスティックな様子が描かれる。鏡に映った身体を通して、少年から青年への成熟というヴァーニャの成長、さらにはシュトルプの構想する美的世界への接近が示唆される。

ヴァーニャは自らの身体に満足しながら泳いでいたが、そのさい偶然にも溺死した死体を目にしてしまう。ヴァーニャは「すでに顔の形を保っていないほどに膨れ上がって、べたついた死体」(82)を目にし、恐怖から逃げ出してしまう。というのも、ヴァーニャは肉体に宿る美が有限のものであり、いずれは滅びてしまうものであると悟ったからである。ヴァーニャは「人間の体には靭帯と筋肉があるが、気持ちが高揚することなく、この肉体を見ることはできない」(83)というシュトルプの肉体を賛美した言葉を反芻しつつ、「すべては過ぎ去ってしまい、滅びてしまう[……]ぼくはいま、自分の美しさを知っている[……]だれがぼくを救ってくれるんだ」(84)と自身の肉体が滅び、美を失うことへの恐怖から、肉

(78) *Кузмин*. Плавающие путешествующие. С. 47.
(79) Там же. С. 48.
(80) Там же. С. 86.
(81) Там же. С. 86.
(82) Там же. С. 87.
(83) Там же. С. 87.
(84) Там же. С. 88.

体の有限性から逃れるための救済を求める。こうして、ヴァーニャはイタリアへと向かいシュトルプと再会することになる。

3.3「翼」が意味するもの

以上のような、主人公の身体によって表現されるナルシズム的自我と自身の身体への執着を経て、ヴァーニャはついにシュトルプと再会する。最終的には「あともう一息で、あなた[ヴァーニャ]には翼が生える、わたし[シュトルプ]にはもう見えている」(85)と心身の変容が翼という語に集約され、ヴァーニャとシュトルプはともに人生を歩むところで結末を迎える。本節では、この作品の題名にもなっている「翼」というキーワードが何を意味しているのかを、文化的コンテクストに照らして明らかにする。とういのも、「翼」の意味を探ることによって、この作品に描かれる男性同士の友愛／性愛、が性科学とは一線を画した性愛観のなかにあることがより明確になるからだ。

この「翼」とはシュトルプが「人々が、あらゆる美や愛――それらは神々からの贈り物であることがわかると、彼らは自由にそして大胆になり、そしてついには『翼』が生えたのだ」(86)と語っているように、ギリシア的世界観をモチーフとした美や愛を求める「新しい人間」の象徴であると考えられる。本作品におけるヴァーニャが手にする「翼」が、死すべき身体からの脱却、さらには不死なる「新しい人間」のアイコンとなっているのではないだろうか。

たしかにヴァーニャが「翼」を手にいれるという表現は、彼自身の精神的解放や明るい未来を表すメタファーでもある。だがこのヴァーニャの「翼」が、プラトンの『パイドロス』のイメージと重ね合わせられているという指摘(87)を踏まえれば、そこに特別な意味を読み込むことができるだろう。ここで重要なのは、プラトンが『パイドロス』のなかで「天界の道行きの一歩を踏み出した者たちに対してさだめられた掟は[……]恋の力によって、相ともに翼を生ずること」(88)であると述べた、「翼の生えた魂」に関する記述である。人間は地上の美を見ることで、美のイデアを想起する。そしてこの美のイデアの希求が恋であり、恋の力によって魂に翼が生え、不死なる神のもとへと駆け上がっていくこととなる。こうした『パイドロス』の思想に代表されるように、古代ギリシアにおいては翼とは「不死の名声」(89)であり、「翼は死すべき人間を不死なる神の高みへと上昇させる」(90)ものと考えられていたようだ。

(85) Там же. С. 105.
(86) Там же. С. 55.
(87) Gillis, “The Platonic Theme in Kuzmin's Wings,” p. 337.
(88) プラトン著、藤沢令夫訳『パイドロス』岩波文庫、1967年、101頁。
(89) 戸高和弘「不死の翼を求めて：ギリシアの文芸批評」『文芸学研究』5号、2002年、91頁。
(90) 同上。

また、一度離れ離れになったヴァーニャとシュトルプであったが、「[……]月光のもと、はっきりと照らされ、疑いようもなくそれは、シュトルプであった」(91)と描写され、シュトルプは再びヴァーニャの前に現れる。月の光に照らされながら登場する「新しい人間」のシュトルプの描写を、ロシアの性愛思想史の文脈に置いてみた場合、そこに特別な意味を読み込めるかもしれない。『翼』の発表の数年後に、ローザノフは『月光の人々』を発表するが、ローザノフが『翼』を読んでおり、衝撃を受けたという事実はすでに述べた。月光の青白さはしばしば同性愛のメタファーとされるが、ここでは「月光の人々」と、月明かりに照らされヴァーニャの前に姿を表すシュトルプという月の青白さによってつながれた二者のあいだに、何らかの連関を見出すことができるかもしれない。事実リンジー・ワットンは、ローザノフとクズミンのおおくの共通点を指摘しつつ、「ホモセクシュアル」というセクソロジーの概念にたいする、ふたりの態度を以下のように指摘している。

> 彼ら[ローザノフとクズミン]は、性的なことがらにたいして保守的態度をとる批評家や性科学者らがホモセクシュアルを病理化し、非難するために用いた自然／不自然、正常／異常という対立の欺瞞を暴いた。(92)

ローザノフは「ホモセクシュアル」という性科学のタームの代わりに、「月光の人々」という独自の概念を駆使して同性愛の概念を組み替えた。同様にクズミンは、『翼』執筆当時には、社会は性科学の言説に溢れていたいもかかわらず、「新しい人間」や「翼」という概念を用いて、性科学のパラダイムと距離を置いた。

このようにみてくると、クズミンは、性科学にみられるような同性愛を特定の人格へと収斂させ病理化するような認識とは距離を置き、女性嫌悪とナルティシズムの充溢した男性だけの友愛と性愛の狭間でゆれる親密な空間――ギリシア的世界観に基づいた「美的ユートピア」(93)を『翼』のなかに創出したといえるだろう。そして、こうした世界観はある程度、ローザノフが思い描いた「第三の性」や「月光の人々」の世界観や、ソロヴィヨフらのもっていた女性嫌悪にもとづく思想に近いものであったといえよう。

4. 女性向け大衆小説における同性愛の表象：ナグロツカヤを例にして

ここまで、『翼』における「新しい人間」や身体をめぐる語り、「翼」の意味を明らかにすることで、クズミンと当時のロシアの性愛思想の近さを示した。では、西欧から流入した変質論のパラダイムと同一線上にある「ホモセクシュアル」の人々は、ロシアにおいてどの地点で出現したのだろうか。現在のところ、その正確な地点を見定めることはかなわない。

(91) *Кузмин*. Плавающие путешествующие. С. 97.
(92) Watton,“Constructs of Sin and Sodom in Russian Modernism, 1906–1909,” p. 376.
(93) *Бреева*. Гендерное конструирование в романе М. Кузмина «Крылья». С. 199.

しかしながら、クズミンと交流があったとされる女性向け大衆小説の作家ナグロツカヤの1910年代の作品には、明確に性科学を基礎とした「ホモセクシュアル」の男性が現れる。つまり『翼』発表の幾年か後には、クズミンの影響をおおきく受けつつも「同性愛」をめぐる概念を変容させた「同性愛者」が大衆小説の領域に存在していたことになる。

ここでは、ナグロツカヤの『ディオニュソスの怒り』と『ブロンズの扉のそばで』という2作品をとりあげ、『翼』で示唆された同性愛がどのように変容していくのかをみていきたい。これまでの研究では、クズミンの性をめぐる思索がナグロツカヤに影響を与えたと指摘されているが(94)、具体的な検討はほとんどおこなわれていない。

ロシアの女性向け大衆小説(95)の代表的作家には、『幸福への鍵』(1909–1913)などの作品で知られるヴェルビツカヤ、少女向け小説で人気を博したチャールスカヤなどがいるが、なかでもナグロツカヤはクズミンと結びつきが強い作家である。

ナグロツカヤは1866年、サンクトペテルブルクに生まれる。母方の祖父母はアレクサンドリンスキー劇場の俳優であり、両親ともに作家であった。1877年、父アポロン・フィリッポヴィッチ・ゴルバチョフが亡くなり生活は困窮するが、その後、高官であるウラジーミル・アルノルドヴィッチ・ナグロツキーと結婚し、執筆活動に専念する。また、1880年代後半、ナグロツカヤはマールイ劇場の女優であった時期もあった。1910年、彼女のデビュー作である『ディオニュソスの怒り』はベストセラーとなり、ドイツ語、フランス語やイタリア語に翻訳され、1914年には映画化され、作家としての地位を築く。

ナグロツカヤの代表作『ディオニュソスの怒り』が刊行された際、その扇情的な内容から、「ポルノグラフィ」という批判に多くさらされることとなった。ところが、クズミンは「ロシアの人々にとってはなじみのない、フランス小説の手法で書かれており、生き生きと明確に如才なく、そして大胆にとてもスリリングで現代的問題に言及しており[……]ナグロツカヤの書籍は高い関心をもって読まれ、現代ではすでに広く知られている」(96)と肯定的な評価をし、ナグロツカヤを擁護している。さらにクズミンは、1913年から1914年のあいだナグロツカヤと同居しており、個人的交流もあった(97)。ここでは、こうした作家間の関わりから一歩踏み込んで、テクストのレヴェルでの検討をすすめていくことにしたい。

(94) *Лю Инь* Творческая эволюция Е. А. Нагродской в контексте идейно-эстетических исканий 1910-х годов: дис. ... канд. филол. наук. М., 2014. С. 66.

(95)「銀の時代」には、都市化や女性の識字率の向上を背景に、都市のミドルクラスの女性をおもな読者層とし、芸術的価値より商業的価値を優先させた作品が多く書かれた。本稿でとりあげる『ディオニュソスの怒り』にくわえ、ヴェルビツカヤの『幸福への鍵』やチャールスカヤの少女小説はベストセラーとなり、1917年の革命までたいへんな人気を博した。

(96) *Кузмин М.А.* Эссеистика. Критика // Проза и эссеистика. В. 3 тт., М., 1999–2000 гг. Т. 3. С. 44.

(97) *Богомолов и др.* Михаил Кузмин. С. 220.

4.1『ディオニュソスの怒り』とカミングアウト：「同性愛者」の出現

『ディオニュソスの怒り』はナグロツカヤの代表作であり、旧来の女性の性役割にとらわれない「新しい女性」を大衆小説の領域で描いた作品である(98)。画家である主人公の女性ターニャにはイリヤという婚約者がいるが、偶然にも列車のなかでスタルクと知り合い、彼の魅力に惹かれる。やがて、ターニャはスタルクとの子ルールーを出産するが、息子はスタルクの暮らすパリに引き取られ、ターニャとルールーは離れ離れとなってしまう。その後も、イリヤとスタルクという二人の男性の間で思い悩む。やがて、イリヤは病死してしまう。結局彼女は、スタルクと結婚し芸術家としてのキャリアを捨て、子どもを育てることとなる。

クズミンとナグロツカヤのつながりは、上述した作家同士の交流という伝記的事実にとどまらず、『翼』と『ディオニュソスの怒り』におけるテクストの構造上の類似にも見出すことができる。その類似とは、両作品ともロシアのサンクトペテルブルクにおいて物語が幕を開け、さまざまな地点を経由し、ローマをはじめとした西欧においてプロットが展開し結末を迎える点である。『翼』の主人公ヴァーニャは、サンクトペテルブルク、ヴォルガ湖畔、ローマと各地を移動し、それとともにプロットが展開する。いっぽう『ディオニュソスの怒り』のターニャも、サンクトペテルブルクからコーカサス、さらにはローマへと各地を転々とする。本稿の問題関心に即していえば、この構造上の類似には規範の中心点としてのペテルブルクと、その規範からの逸脱としての西欧という構図を読み取ることができるだろう。『翼』のヴァーニャはペテルブルクでシュトルプに出会い、「新しい人間」をめぐる新しい考えやシュトルプの関係に動揺しつつも、その後シュトルプを追ってローマへ行き、「新しい人間」へと変容する。同様に『ディオニュソスの怒り』のターニャも、ペテルブルクでのパートナーであるイリヤとの婚約(またその先の結婚)という軛から抜け出し、ローマを中心にスタルクを含んだ三角関係を築き、主体的な性を謳歌する。このように旧来ある規範や慣習を変革しあらたな価値や人物像を提示しようとするナグロツカヤの志向は、クズミンの『翼』にみられる「ロシアからの移動」というテーマを参看し、作品に取り入れたのではないだろうか。

さらにテクストのレヴェルで、クズミンとナグロツカヤの関係を指摘した研究もわずかに存在する。たとえばロザリンド・マーシュは『ディオニュソスの怒り』に登場する主人公ターニャの恋人スタルクと、『翼』に登場するシュトルプとの共通点をこう述べている。

> エドガー・スタルクは、ナグロツカヤの作品に登場するヒロインの恋人であり、世界をまたにかける人物であるが、彼は半分英国人、半分ロシア系ユダヤ人である[……] ――ちょう

(98)『ディオニュソスの怒り』の詳細は、安野「ロシア女性大衆小説における『新しい女性』のヴィジョン」を参照。

どそれは、クズミンの『翼』(1907)に登場するシュトルプのようだ。ナグロツカヤはおそらくクズミンの影響を受けたのだろう[……]。(99)

『翼』と『ディオニュソスの怒り』を結ぶキーパーソンが、同性愛の欲望をもつシュトルプと、女性的ジェンダーイメージを身にまとったスタルクという「典型的な男性」の規範から外れた人物であることは注目に値する。象徴主義と大衆小説について、ほぼ同時代に書かれていたにもかかわらず、その関わりがほとんど言及されてこなかった研究史において、非規範的な性のあり方を検討することによって、両者をつなぐ糸口を見出す余地があることを、マーシュの指摘は示唆しているように思われる。

本稿の主眼は、同性愛の表象を追うことにあり、上記の先行研究に登場するスタルクはヒロインであるターニャの恋人であり、異性愛の人物として描かれている。したがって『ディオニュソスの怒り』において、本節で注目したいのは、ラチーノフという人物である。彼は、「カミングアウト」という行為と、自分自身を性科学の言説で説明することによって、「ホモセクシュアル」の男性として表象されることになる。

ラチーノフはターニャの友人であり、彼女の恋愛や生き方についてのよき理解者として描かれている。『ディオニュソスの怒り』はターニャと婚約者イリヤ、愛人スタルクというメロドラマ的三角関係を軸にプロットが展開するが、ラチーノフはこの異性愛の三角関係からつねに疎外された人物である。スタルクに好意を寄せていたことがわかるが、ターニャへの自らのセクシュアリティの告白以前に、好意を表に出すことはない。

彼は物語の終盤においてターニャに自らの「秘密」(100)——性愛の対象が男性であることを明らかにする。

私[ラチーノフ]が子どものころ無邪気ながら好きになったのは、あなたと同じように、同性だった。[……]私は、あるリツェイに入れられて、自分と同じ年の男の子ふたりの淫らな行為を目撃した時、ぞっとして彼らとは絶交したよ。[……]ぞっとしたのは、女性の美しさにたいして何も感じないとわかった時だ。私の気持ちをすっかり支配したのは、青年の美しい肉体だった。(101)

ここでは、ラチーノフが男性を性的対象とし、少年時代の経験や男性の肉体への関心が語られている。男性の肉体を賛美する場面は『翼』にもみられたが、『翼』と明らか異なっているのは、ラチーノフ自身が自身の性をめぐる内面をターニャという他者に明確に語っている点である。フーコーが「真実の告白は、権力による個人の形成という社会的手続きの

(99) Rosalind Marsh, “Travel and the Image of the West in Russian Women's Popular Novels of the Silver Age,” *New Zealand Slavonic Journal* 38 (2004), pp. 12–13.

(100) *Нагродская Е.А.* Гнев Диониса. СПб., 1994. С. 203.

(101) Там же.

核心」[102]であると述べるように、ここでは自身の内面、すなわちセクシュアリティ（＝男性に惹かれること）を語ることにより、「同性愛者」という主体が形成されつつある。

またラチーノフは、自分が同性を好むことを受け入れられずに、女性との交友関係を結ぶが、「自分自身を恐れ、恥じる」[103]こととなる。ここでは、異性愛主義にもとづき、同性愛は恥ずべきものであるという否定的側面が強調されており、『翼』で描かれたユートピア的な男性同性愛のイメージとは対照的である。

さらに続くラチーノフの独白からは、性科学の言説が明白に表れている。以下は、自らのセクシュアリティを受容できずに、女性たちと関係をもったことにたいするラチーノフのことばである。

> 私は、これらの女性たちたちを苦い薬として受け入れた。その薬で自分の病気、恥が完全に治ると期待してね。もしも正常な人間が何らかの倒錯(извращенности)に耽ることを強いられているのなら、彼が経験しなければならないことを味わった。[104]

上記の引用では、自身の男性への欲望は「病気」や「倒錯」であり、治癒すべきものであるという認識が示されている。また同性愛という「倒錯」に、「正常」という概念が対置されており、異性愛＝正常、同性愛＝倒錯という二項対立が明確にあらわれる。特定のセクシュアリティを「病気」や「倒錯」として囲い込み、「正常」なものと区別するこうしたラチーノフのことばから、性科学に立脚した「ホモセクシュアル」の男性像を読み取ることは容易であろう。

4.2『ブロンズの扉のそばで』における同性愛の前景化

前節では、『ディオニュソスの怒り』においてカミングアウトと性科学の語りを通して、シュトルプという「同性愛者」が明確に描かれていたことを指摘した。ここでは、ナグロツカヤの『ブロンズの扉のそばで』を取り上げ、男性同性愛の表象をさらに探っていくことにしよう。『ブロンズの扉のそばで』では、前節でとりあげた『ディオニュソスの怒り』以上に、プロット進行の点で同性愛が中心的な位置を占めており、男性間の性愛関係がきわめて明確に描かれている。

1914年に出版された『ブロンズの扉のそばで』は、ナグロツカヤの作品のなかでもとくに問題作となった。というのも、ナグロツカヤは『ブロンズの扉のそばで』が出版される三年前に『ブロンズの扉』(1911)を発表しようとしたが、同性愛を中心とした「性的倒錯」を描いたという理由で、検閲により出版がかなわなかったのからだ[105]。この『ブロンズの扉のそ

(102) フーコー『性の歴史Ⅰ』、76頁。
(103) *Нагродская* Гнев Диониса. С. 203.
(104) Там же.
(105) *Савицкий С.А.* Хозяйка «метафизической квартиры»// *Нагродская* Гнев Диониса. С. 7–8; *Лю Инь* Творческая

ばで』は『ブロンズの扉』をもとに、プロットの改変はおこなわず、問題箇所を削除あるいは伏せ字にして出版された作品である。とはいえ、この1914年版においても同性愛は明瞭に描かれている。

『ブロンズの扉のそばで』では、マルガリータとトーニというふたりの姉弟を軸にプロットが展開する。マルガリータは、女優である母リディア、継父セミョーンとイタリアで暮らしながら大学で研究をし、博士号習得を目指している。マルガリータは友人デェメーンティに好意を寄せるいっぽう、モスクワで資産をもつ男性サルノフから好意を寄せられる。周囲はマルガリータにサルノフとの結婚をすすめる。いっぽう、マルガリータの弟であるトーニは、義理の父との不和により家を出て、ペテルブルクのコンセルヴァトワールで学んでいたが、突然マルガリータたちのところ戻って来る。トーニは物語の序盤で「僕は女性が全く好きじゃないのさ」(106)と、性的関心が女性に向かないことを、姉マルゴーシャにはっきりと述べており、異性愛の規範から逃れた人物であることが読者に印象付けられる。

プロットの主軸を成すのは、当時としては進歩的な女性マルガリータ、さらには彼女の母親でありリディアをめぐる異性愛をめぐる物語であろう。作品冒頭でマルガリータは友人デェメーンティにたいして「わたしはあなたを愛しているわ」(107)と述べており、男女の恋愛模様の描写によってこの作品は幕をあける。主人公マルガリータと友人デェメーンティ、サルノフ、マルガリータの母リディアとデェメーンティ、マルガリータの従姉ニーナとデェメーンティといった、ヘテロセクシュアルのメロドラマが描かれる。

しかしおそらくこの作品の面白さは、プロットが後半に進むにしたがって、トーニをめぐる同性愛の主題が前景化し、マクレイノルズが「この作品を特徴づけるのは、ホモセクシュアルの芸術家[トーニ]が自分の姉と、他の男性をめぐって争うことだ」(108)と述べるように、トーニを中心に同性愛をふくんだ三角関係が形成される点であろう。『ディオニュソスの怒り』では物語は異性愛の三角関係に終始しており、ラチーノフという同性愛者はこの異性愛のメロドラマに直接関与することは少なく、周縁的な人物であった。しかし『ブロンズの扉のそばで』では、トーニをめぐる同性愛の関係は物語のなかで存在感をみせる。物語の終盤では、サルノフの自殺が示唆されるが、その原因はトーニとの関係をめぐるものであり同性愛のテーマがプロットの進行に重要な役割を果たしている。

эволюция Е. А. Нагродской в контексте идейно-эстетических исканий 1910-х годов. С. 77. また『ブロンズの扉』は、ロシア本国では発表することができず、エレーナ・ナグロツカヤ名義でドイツにて発表された。Elena A. Nagrodskaja, *Die bronzene Tür: Eine Liebesgeschichte voll verworrener Leidenschaft*［ブロンズの扉：錯綜した熱情にあふれたある愛の物語］(Berlin : Borngräber, 1913).

(106) *Нагродская Е.А.* У бронзовой двери. СПб., 1914. С. 32.

(107) Там же. С. 5.

(108) Louise McReynolds, “Introduction,” in Evdokia Nagrodskaia, *The Wrath of Dionysus* (Bloomington: Indiana University Press, 1997), p. x iv .

さらにこの作品において特筆すべきは、同性愛をめぐる描写がきわめて明示的である点だ。トーニと、彼を本当の息子のようにかわいがるデェメーンティとが関係をもつ場面は特徴的である。ここでは、「彼女は、はじめに冗談を言いながら、彼の前で膝をかがめてお辞儀(реверанс)し、彼にむかって歌う[……]」(109)というように、代名詞である「彼女」と「彼」が使用され、さらには通常女性が行う場合に使用される「右膝をかがめるお辞儀(реверанс)」という語が用いられることから、男女一組のやりとりが描かれているように思われる。さらに「彼女は彼に甘いことばを言う[……]次第に彫像のようなこの男への愛が、彼女を捉えつつある」(110)と続き、この男女が親密な関係にある様子がみてとれる。ところが、その後の以下のやりとりから、この男女が、じつは男性同士であることがわかる。

> 「すべては騒がしく過ぎ去る…。そしてみじめだ…、みじめな白夜…、白夜の短い恋はみじめだ…、みじめな幻想、ディーマ…」
>
> トーニは目を見開きデェメーンティの顔を見るが、その目は、戸惑いと批判にみちているようだった。(111)

これまで「彼女」と指示されることで女性と思われていた人物、すなわちパートナーの男性であるデェメーンティにたいして愛を語りかけていた人物は、じつはトーニであったのだ。一見すると、ありふれた異性愛であるかのように思われた描写が、男性同士の性愛を明確に示すものであることがわかる。クズミンが男性同士の愛を決定的に描かなかったことを思い起こせば、この作品において同性愛をめぐる主題がいかに前景化しているかは一目瞭然であろう。

すでに述べたように、20世紀初頭のロシアにおいて同性愛のテーマはひとつのモードとなっており、文学作品にも登場した。そしてこの同性愛(あるいは同性愛者像)のイメージは、「男／女」の規範を再考するという意味において、作家・読者の関心をひいた。しかしその提示の仕方は、象徴主義と大衆小説においては根本的に異なっていたのではないだろうか。すなわち、20世紀初頭において性科学が言論の場を席巻していたにもかかわらず、クズミンは意識はしていたようだが、あえてそうした言説から距離をとりロシア的性愛論にもとづく「新しい人間」像を創造し、時代の流行と相反することによって、芸術性という面で高い評価を得た。いっぽうで、ナグロツカヤは性科学という時代の流行にあわせて同性愛者を造形することで、読者大衆の人気を集めた。このように、性についての多様な言説が登場し、性の境界を揺さぶる作品が描かれたが、その戦略は作家によって、そしておそらく文学ジャンルによって異なっている。その戦略のちがいのひとつに、性科学とロシアの性愛思想というふたつのパラダイムが大きく関わっているのではないだろうか。そし

(109) *Нагродская* У бронзовой двери. С. 160.
(110) Там же. С. 160.
(111) Там же. С. 160–161.

てこの依拠するパラダイムのちがいは、作家個人に還元されるものではなく、文学ジャンルと大きく関わっているといえるだろう。

おわりに

本稿は、「銀の時代」における性をめぐるふたつの言説――西欧から流入した性科学と宗教思想を基盤としたロシアの性愛論――を参照しつつ、クズミンの『翼』、さらには女性向け大衆小説の代表的作家ナグロツカヤの作品に描かれる男性同性愛のあり方を探る試みであった。西欧から流入した性科学は1880年代後半以降ロシアを席巻しており、『翼』をロシア文学史において初の「ホモセクシュアル小説」とみなす見解もある。しかし、この見解には留保をつける必要があるだろう。というのも、『翼』に描かれるのは性科学に基礎づけられた「同性愛者」という概念とは一線を画した、友愛と性愛のあわいを揺蕩う関係、さらにはこの微妙な関係性によってつながれた女性を排除した男たちの共同体であったからだ。

ロシア文学において「同性愛者」が出現した正確な時期の特定はさらなる検討を要するが、1910年代の大衆小説の領域において性科学を流用した「同性愛者」が顕在化することとなった。とりわけ、ナグロツカヤはクズミンの影響を受けつつ「同性愛者」を作品のなかに創出したといえるだろう。ここに、当時のロシアにおいては非規範的とされていた同性愛という性現象をひとつの手がかりとして、同時代にありながらこれまでほとんどその関係が検討されてこなかった、象徴主義と大衆小説とをつなぐ糸口を見出せたように思われる。

またここまでの考察から、テクストをクィア・リーディングの方法論を用いて読むことが孕む陥穽も浮き彫りになった。それは、『翼』という作品が男性間の性愛に関する描写がほとんどないにもかかわらず、当時の作家や批評家、さらには現代の研究者までもが、このテクストに同性愛のテーマを読み取ろうとする姿勢だ。いいかえるなら、それは『翼』を当時の変質論や性科学と結びつけたうえで、同性愛者像を創造し、消費(そして時には排除)してきた批評家＝読者の欲望である。

ではなぜ、読者は『翼』に同性愛者像を読み取ろうとするのか。それは、クズミン自身に男性パートナーが存在した事実をもとに、主人公ヴァーニャと同性のパートナーをもつ作者とを同一視する読みがなされてきた点が挙げられる。すなわちクズミンの日記や風評から知ることができる、同性のパートナーがいたという事実=スキャンダルは、『翼』の読解において決定的な役割を果たしているのだ。しかし、作家個人のセクシュアリティや伝記的事実と書かれたテクストとを混同すること――つまり、クズミンをクローゼットから引きずり出しテクストと結びつけ、作者や登場人物の同性愛的傾向を指摘するといった読み方の背景には、読者の内なる同性愛嫌悪があると考えられる[112]。というのも、クズ

(112) 本箇所の記述に関しては、アメリカ文学をクィア・リーディングによって論じた松下『クィア物語論』19–29頁から示唆を得た。

ミンに同性の性的パートナーがいたということを根拠に、『翼』のなかの主人公ヴァーニャ＝作者クズミンという同性愛者像を構築する読解とは、読者が意識的であれ無意識的であれ「ホモセクシュアル」というアイデンティティを一方的に与えることであり、そして、これまで排除の対象とされてきた性科学の名を負わせるこの行為は、嫌悪の表明にほかならないからだ。したがって読者が読み取っているものは、作品テクストなのではなく、じつは、テクストに同性愛を読み取りたいとするみずからの内にひそむ欲望、すなわち同性愛嫌悪なのではないだろうか。

以上のような20世紀初頭のロシア文学における「男性同性愛」をめぐる言説の検討、クィア・リーディングの実践、さらにはその陥穽の指摘を通して、われわれはロシア文化を対象とした非規範的性のあり方を問うクィア研究へと向かう準備が整ったといえそうだ。